

編者 杉山 隆二・池辺 稔・星野 通平・
柴崎 達雄

堆積盆の研究で、過去研究者はそれを構成している岩石の部分にとかく目を向け勝ちであった。すなわち、堆積盆の変遷史、構造発達史、堆積岩の続成変化などに関する研究成果は無数に得られている。しかし、堆積盆の地層中に含まれる流体に関しては、流体そのものの性質などは比較的明らかにされているが、流体移動については未だ不明な点が極めて多い。従来、堆積盆の比較的浅いところでの流体移動は水文地質や、温泉地質の分野で取扱われ、比較的深いところでのそれは主として石油地質の分野で扱われてきた。この両分野間での対話はほとんど無かった。しかし、同じ堆積盆中での流体移動であるので、互いの研究成果と問題点を披露し合うことは今後の両分野の発展に有益であろうと考えるのは自然である。

本書はこの趣旨に沿って昭和55年9月に東海大学海洋研究所地殻研究部が主催した同テーマのシンポジウムの成果内容をまとめて出版したものである。著者は石油地質、水文地質、構造地質、地熱・温泉などの分野で第一線で活躍している20名であり、次の5つの部門に分けられている。第Ⅰ部：石油の流動と集積、第Ⅱ部：地下水の移動、第Ⅲ部：地熱と温泉水の移動、第Ⅳ部：堆積盆の形成、第Ⅴ部：総合討論。第Ⅰ部では最近の石油成因と一次移動論のレビューのほかに一次移動と集積における水の役割、移動の営力、メカニズム、さらには近年の新しい傾向である油田形成のシミュレーションモデルに到るまで幅広い問題で、各著者独自のアイディアが紹介されている。第Ⅱ部は地下水の流動系、水の収支、さらにそれに関連して地下水汚染の公害問題にも言及している。第Ⅲ部では温泉水の流動、温泉胚胎層の水理定数などに関するケーススタディのほかに熱水挙動および熱水貯留層の成因について主として物理的側面から地熱エネルギー開発を念頭において考察がなされている。第Ⅳ部では大陸マージンにおける堆積盆形成と油田分布の関係、石油貯留構造形成に果たしたマグマ性陥没盆地と島弧変動の役割が著者独自のアイディアでまとめられている。また、流体移動におけるハイドロリック・フラクチャーの役割についても解説がなされている。

以上のように石油・地下水・地熱流体などの資源の探査・開発のほかに、地盤沈下・地下水汚染など身近な環境問題など堆積盆中の流体移動と深い係りのある数多くのテーマについて最新の情報が余すところなく網羅されており、この方面の専門家はもとより、地球化学、地球物理、土木、建築、農業、気象関係者並びに地学教育者に一読をお奨めしたい一編である。(B 5

版 356 ページ、発行者 東海大学出版会、頒布価格 6,000円) (石油公団 浅川 忠)

第4回 水-岩石相互作用国際集会 (WR I-4) の会期について

上記国際集会の会期は1983年8月29日～9月8日です。詳しいことは第1回サーキュラーをごらん下さい。サーキュラーの請求先は岡山大学温泉研究所 酒井均教授です。

第5回地質年代学・宇宙年代学・同位体地学国際会議組織委員会事務局からのお知らせ

表記国際会議の日程・場所・討論課題が次の通り決まりました。詳細は Second Circularをご覧ください。

日程 1982年6月27日(日)登録、カクテルパーティ
6月28日(月)～7月2日(金) セッション

会議場 日光市総合会館(日光市安川町2-47)

野外巡検 A 中部本州 7月3日～7月8日

B 富士・箱根・伊豆 7月3日～7月6日

Organized Session 課題 (Organizer)

1. Isotopic constraints on mantle and crustal evolution (R.K. O'Nions)
2. Terrestrial noble gases (F.A. Podosek, I.N. Tolstikhin)
3. Isotopes applied to paleo-environment (E. Galimov)
4. Cosmogenic nuclides (J.R. Arnold, M. Honda)

IMPORTANT DATES

The Conference registration fee (¥22,000), accommodation charge* and the registration form A-1 must be received by February 28, 1982

Full payment for Field trip (Form A-2) March 31, 1982

Abstracts must be received by April 30, 1982

*国内参加者向け和式旅館の申込締切は3月31日。

Second Circularご希望の方は下記宛て請求下さい。

〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3

工業技術院地質調査所地球化学課内

第5回年代同位体国際会議組織委員会事務局

柴田 賢

編集者 佐藤 和郎・森岡 正名

発行所 日本地球化学会

〒113 東京都文京区弥生2-4-16

学会センタービル(4F) 日本学会

事務センター内

電話 東京 03 (815) 1903

振込先銀行 三井銀行上野広小路支店

普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 95

1982. V. 4

1982年度年会は琉球大学で開催

日時 10月18日(月)～20日(水)

会場 琉球大学教養部(沖縄県西原町字千原1番地)

[交通] 市外バスターミナル、国際通りの市外

バス停留所(保健所前、松尾、牧志、安里、大

道)から新琉大線(那覇交通)にて琉大東口下

車。または、琉球バスにて琉大終点下車。約50

分。タクシーで那覇市内から約30分。

内容 課題講演、一般講演、および特別講演。

課題講演は、「岩石と水の相互作用」「サンゴ礁の地球化学」「海洋の化学」の3テーマを予定しています。

懇親会 10月19日(火)18時からグリーンプラザ(浦添市西原)にて。会費4,000円(学生2,500円)

エキスカーショ ン 10月21日(木)8時～18時30分。

費用4,000円(昼食付)。観光バスによる沖縄本島

巡り。主な行先地: 東南植物楽園(沖縄本島中

部)、万座毛、海洋博記念公園(沖縄本島北部)

講演申込締切 6月26日(土)

申込受け次第、講演要旨オフセット用原稿用紙をお送りします。

講演要旨原稿締切 8月21日(土)

参加、要旨集、懇親会、およびエキスカーショ ン申込締切 9月11日(土)

以上の申込みには必ず所定の申込用紙を用いて下さい。申込用紙は地球化学会ニュースに添付のものを用的か、年会実行委員会宛てに請求下さい。

要旨集金代3,500円(学生3,000円)、懇親会費、エキスカーショ ン費用は上記申込期日までに、銀行振込(琉球銀行、宜野湾支店、普通065754、日本地球化学会年会実行委員長 兼島清)または郵便振替(鹿児島-6-11381、1982年日本地球化学会年会)にて、御送金下さい。(講演申込者には要旨原稿用紙と一緒に

振替用紙をお送りします。)尚、要旨集代金は、予約申込のない時には3,800円になります。参加費は不要です。

申込先および連絡先 〒903-01 沖縄県西原町字千原1番地、琉球大学理学部内 1982年度日本地球化学会年会実行委員会、兼島清(あるいは平良初男) 電話09889-5-2221 内線2656, 2657, 2654

＜宿泊および往復航空運賃の団体割引サービス＞

宿泊および往復航空運賃の団体割引を下記の通り名鉄観光サービス沖縄営業所(那覇市久茂地2-14-7、電話0988-62-8211)で行ないますので、8月21日(土)までに営業所へ直接お申込み下さい。下記の料金表は1人当りの費用です。

出発地	東京	名古屋	大阪
エコノミーホテル(シングル)	79,500 ^円	78,200 ^円	69,400 ^円
” (ツイン)	77,500	76,200	67,400
” (トリプル)	75,500	74,200	65,400
ビジネスホテル(シングル)	75,500	74,200	65,400
” (ツイン)	73,500	72,200	63,400
民 宿	65,000	64,000	55,000

費用に含まれるものは、発地からの往復航空運賃と4泊5日の宿泊代(朝食付)、とホテルから会場(琉球大学)までの送迎バスの代金です。空港、ホテル間の交通費は含まれません。エキスカーショ ン参加の場合は、さらにホテル一泊分(6,500円)が追加されます。また、デラックスホテルを希望の方は、上記の金額より約2万円余分にかかります。

年会は日本地球化学会の主催 日本化学会の共催です。

会誌の編集について

“Geochemical Journal”と“地球化学”の刊行体制が少しかかりました。それぞれの編集長からのお知らせがあります。会誌2誌には年間に40~50編の論文が掲載されています。会員は850人程ですから20年に1度投稿すれば会費のもとがとれる勘定にもなります。がんばりましょう — ニュース係 —

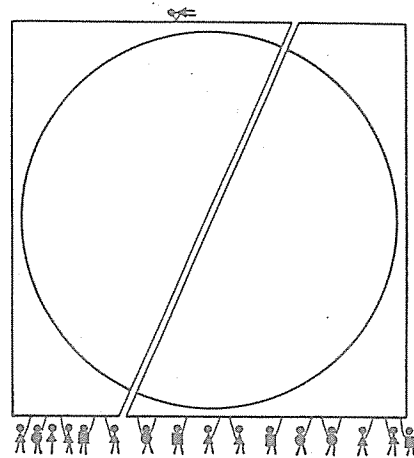
「Geochemical Journal」への

投稿原稿の送付先の変更

— 国 雅 巳

G. J. 編集委員長の交代に伴い、原稿の送付先が下記のように変更になりました。多数の方の投稿をお待ちしております。とくに新人の投稿を歓迎致します。投稿について疑問の点は新委員長に問合わせて下さい。

原稿送付先: (〒227) 横浜市緑区長津田町4259
東京工業大学大学院総合理工学研究科 一国雅巳
(電話 045-922-1111, 内線2454)



女性海外留学奨学生の募集

CWA Jでは1983年度に海外の大学院、研究機関へ留学を希望する女性を募っています。人員は3名で1983年9月より1年間に150万円が支給されます。現在31才から39才までの5人が米国、カナダの大学院等に留学中です。出願〆切は9月10日ですが、所定の出願用紙は6月30日までに60円切手5枚と返信用封筒(10.5 cm × 23.5 cm)を同封し、下記に請求して下さい。

〒108 東京都港区高輪4-14-13 荒木哲子

「地球化学」の編集について

小 倉 紀 雄

従来まで地球化学会編集委員会はGeochemical Journalと「地球化学」の編集を行なってきましたが、本年度より各々の編集委員会を独立させることになりました。

「地球化学」は第1巻(1967)から第10巻(1976)まで年に1回、それ以降年に2回発行されていますが、論文の投稿数は少なく、発行は遅れがちでした。地球化学は会員にとってあまり魅力ある存在でなかったように思われます。

これからは毎号、興味ある話題について特集号を編集し、その話題について総説、論文を集めまとめたと思っています。話題の例として、東京湾の物質循環と汚染の歴史、生物圏における二酸化炭素の循環、水-岩石間の相互作用、月岩石の地球化学などを考えています。その他に新しい分析法の紹介など総説や解説を重視したいと思いますが、一般論文の投稿も歓迎致します。

特集が順調にすすみ、投稿論文数が多くなれば、現在の年2回から年4回の発行も夢ではありません。「地球化学」を魅力ある、役に立つ雑誌にするために、会員の皆様の御協力とご批判をいただければ幸いです。

「地球化学」編集委員 小倉紀雄(東京農工大・農)
小沼直樹(茨城大・理)

両 雄 激 突 6 月 12 日 (土)

地球化学会例会

午後2時から東大理学部化学教室新館4階講義室で、小沼直樹・兼岡一郎の両氏により“マントルとは何か”について、それぞれ元素組成および同位体組成から議論が展開されます。
ぜひご参加下さい。

講演要旨集(バックナンバー)の販売について

1981年度日本地球化学会年会(1981年10月)の講演要旨集の残部が若干あります。御希望の方は下記宛に御連絡下さい。

価格 2,000円(送料共)

連絡先 〒424 静岡県清水市折戸1000

東海大学海洋学部 岡部史郎

電話 0543-34-0411

1981年度 第4回評議会(新旧合同)報告

と き: 1981年12月12日(土)

ところ: 赤門学士会館

出席者: 木越会長、北野副会長、一國、岡部、小椋、小倉、小沼、佐藤、柴田、杉崎、杉村、田中(重)、田中(剛)、寺田、半田、坂野、本田、増田、松尾、松本、馬淵、水谷、山岡、綿抜各評議員、鳥居監事(オブザーバー)

報 告

1. 学術会議関係

IAGCとIGCの今後の開催予定が紹介された。1988年度IGCについては日本での開催が要請されている。

学術会議第4部関係の委員会委員の定員削減が行われ、地球化学宇宙化学研究連絡会の委員は第12期から1名減となる。

2. 庶務委員会(一國評議員)

文部省に研究成果刊行費の申請を行なった。申請額は1,809,000円であった。

正会員のうち、学生、院生またはこれに準ずるものの確認を行った。11月15日現在で1982年度の対象者は19名であった。

3. 財政委員会(綿抜評議員)

本年度分の評議員に対する旅費を支出した。

研究成果刊行費を申請したさい、文部省から繰越金の額が多いという指摘を受けたので基金の復活を考えている。

4. 編集委員会(松尾評議員)

Geochem. J. 15巻4号は配布済、5号は1月中旬に発送の予定、6号の原稿は揃っているので2月上旬には完成する見込である。地球化学15巻1号は近日中に発送する。

5. ニュース発行委員会(佐藤評議員)

ニュースNo.94(4頁)を印刷中である。

6. 本年度手会の決算報告(岡部評議員)

配布資料に基づいて説明があった。

議 事

1. 1982年度手会について

10月10日~20日の間に開催することとし、日程については琉球大学に一任することにした。

2. 2月例会について

北野新会長による会長講演を2月13日に東京で行う。

3. 入退会について

1981年8月から9月末までの入会は正会員6名、退会は正会員2名であった。この結果、9月末現在

の正会員は847名、賛助会員13名、名誉会員4名、計864名となった。

4. 学会事務センターとの事務契約について

学会事務センターから提示された案を承認し、その形で次年度の事務契約を結ぶことにした。

5. 雑誌の交換について

ソビエト、アゼルバイジャン科学アカデミーとの間でGeochemical Journalと先方の地球化学関係のProceedingsとの交換することにした。これを含めるとGeochemical Journalの寄贈・交換は15部になる。

新旧合同の評議員会を散会した後、新評議員による打合せ会があり、会務の分担について新会長の案が示された。正式の決定は2月の評議員会で行われる。

新入会員

1981年9月30日までに次の方々が入会されました。

よろしくお願い致します。

木村 幹	青山学院大学理工学部
千葉 茂	福島大学教育学部
澤田 清	新潟大学理学部化学科
楯 博幸	九州大学理学部化学科
鈴木 俊雄	新潟大学理学部
石川 正道	東京工業大学総合理工

退会会員

植村 齊	
坂本あかね	日本気象協会東海支部

日本地球化学会庶務へのお問い合わせは下記へお願い致します。

庶務幹事 半田暢彦

〒464 名古屋市千種区不老町 名古屋大学

水圏科学研究所

電話 052-781-5111

元素の同位体比データ蒐集について

衆知の如くIUPAC(International Union of Pure and Applied Chemistry)の中には、化学のすべての分野に必要な用語や単位の統一化、各種のデータの標準化をはかり、世界各国で出された研究成果を同一の場で討論することができるように努力している各種の委員会があります。この中で化学だけでなく関連するすべての分野の人達に関係のあるものは何といっても国際原子量委員会(ICAW International

Commission on Atomic Weight)ではないかと思われま

元素の原子量が、主としてそれぞれの元素の同位体比を用いて計算されるようになったのは1960年代にはいつからで、現在でも元素によっては1950年代又はそれ以前に求められた同位体比のデータを用いて原子量を計算しているもの(C, S, Se, In, Sb, La, Dy, Ho, Er, Hf, Ta, Os, Ir, Pt, Hg), 1960年以後のデータを用いていても信頼度が十分でないもの(Ti, Fe, Zn, Ge, Zr, Sn, Xe, Sm, Eu, Gd, Er)があります。これは、とりもなおさず私達は1/4以上の元素について、信頼度が十分でない原子量を使っていることになります。

元素の原子量を求めるための同位体比は、絶対測定をされたものでなければならないのですが、もしそれが無理な場合には、多くの人が異なる目的のために異なる機器で測定したデータを集積し、比較検討するという方法に頼らざるを得ません。

ICAWの下部機関にSAIC(Subcommittee on Assessment of the Isotopic Composition of the Elements)と称する小委員会があり、各委員は自らも同位体比の絶対測定を試みると同時に、世界中のデータを精力的に蒐集し、毎年そのデータをもちよって検討を行っておられます。

わが国においても、種々の元素の同位体比が種々の目的のために測定されている筈ですが、その結果が国内の雑誌、特に研究所、大学などの紀要、年次報告、研究報告などに掲載された場合には、ほとんど発掘されずに終わってしまう、それがまた日本語で書かれている場合にはこの傾向は増大されます。SAICの委員長より、日本で測定された元素の同位体比、特に上記のようなおそれのあるものを重点的に集めるように依頼をうけました。つきましては、同位体比測定データを含む報文、1950年代以降現在まですべてについての別刷を2部下記へお送り頂きたく存じます。特に始めにかきました元素について絶対測定をして頂けるとよいのですが、相対的な天然の試料の値、試薬の値などもデータの精度を問わず集めております。

なお参考のためにICAWおよびSAICの1981~1983の委員名を下記に記します。

ICAW: Chairman: N. E. Holden (USA); Secretary: R. L. Martin (Australia); Titular Members: R. C. Barber (Canada), I. L. Barnes (USA), R. Hagemann (France), T. J. Murphy (USA); Associate Members: P. J. De Bièvre (Belgium), R. Gonfiantini (Italy), N. N. Greenwood (UK), J. R. De Laeter (Australia), H. S.

Peiser (USA), M. Shima (Japan), W. H. Johnson (USA); National Representatives: T. L. Cahng (China), V. I. Goldanskii (USSR).

SAIC: Chairman: P. J. De Bièvre; Secretary: I. L. Barnes; Members: R. Hagemann, N. E. Holden, J. R. De Laeter, T. J. Murphy, H. S. Peiser, E. Roth (France), H. G. Thode (Canada), The late A. E. Cameron.

別刷送付先 郵便番号110

東京都台東区上野公園7-20

国立科学博物館 島 正 子

ニュース記事や御意見をお寄せ下さい

本ニュースは年3回(大体5月, 9月, 1月)発行されます。記事は横書き1行24字(用紙は自由)にて書いていただければ助かります。次回96号は7月末/切9月上旬発行の予定です。— ニュース編集係 —

編集者 田 中 剛, 清 水 洋
〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 地球化学課
電話 0298(54)3558
発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内
電話 東京 03(815)1903
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 96

1982. VIII. 23

1982年度 日本地球化学会年会

主催 日本地球化学会 共催 日本化学会

日 時 10月18日(月)~20日(水)

会 場 琉球大学教養部

連絡先 琉球大学理学部化学科 兼 島 清(沖縄県西原町字千原1番地)

電話 09889-5-2221

内線 2656, 2657, 2654

	会場	9	10	11	12	13	14	15	16	17
18 日 (月)	A		一般講演				課題講演 I (海洋の化学)			
	B		一般講演				一般講演			
	C		一般講演				一般講演			
	D		一般講演				一般講演			
19 日 (火)	A		一般講演				一般講演	総会	特別講演	
	B		課題講演 II (岩石と水の相互作用)				一般講演			
	C		一般講演				一般講演			
	D		一般講演				一般講演			
20 日 (水)	A		一般講演				一般講演			
	B		一般講演				一般講演			
	C		一般講演	課題講演 III (サンゴ礁の地球化学)			課題講演 III (つづき)			
	D		一般講演							

講演時間: 一般講演は討論を含めて15分, 課題講演はコンピーナーの指示による。

懇 親 会: 10月19日(火)18時からグリーンプラザ(電話 0988-78-2411)で
会費 4,000円(学生 2,500円)

エキスカッション: 10月21日(木)8時~18時30分, 費用 4,000円(昼食付)観光バスによる
本島巡り。

第1日 10月18日(月)

A会場

一般講演 (9:00~10:15) 座長 松本英二

- 1 A 01 無汚染採水器の試作(広大総科・室工大・名大水圏研)。坪田博行・室住正世・金森 悟
- 1 A 02 無汚染採水器による海水中各種微量成分濃度(室工大・名大水圏研・東大海洋研・広大総科・東海大海洋・金沢大理)室住正世・中村精次・金森 悟・児玉幸雄・。坪田博行・児玉哲夫・豊田恵聖・寺田喜久雄
- 1 A 03 北太平洋における銅の分布(名大水圏研)金森 悟・金森暢子
- 1 A 04 北太平洋におけるマンガンの分布(東海大海洋・名大水圏研)菊谷 彰・豊田恵聖・岡部史郎・金森 悟
- 1 A 05 海水中の溶存鉄の分布と挙動(気象研)鈴木款(10:30~12:00) 座長 豊田恵聖
- 1 A 06 単純モデル系による微量重金属元素の形態変化(足利工大)荻原俊夫
- 1 A 07 海水中の有機形水銀化合物の加水分解生成物(気象研・地化協)。鈴木 款・三宅泰雄
- 1 A 08 海水中の希土類元素の定量—I—(神戸大自然科学・東理大理・東大理)。川上 紀・藤本義典・増田彰正
- 1 A 09 北太平洋における栄養塩、酸素、全炭酸の分布とRKRモデル(名大水圏研)。池上 尚・金森 悟
- 1 A 10 東京湾海底土における鉛汚染の歴史(青山学院大・地調)平尾良光・。福田悦子・今村哲史・松本英二・木村 幹
- 1 A 11 鉛同位体比からみた東京湾の鉛汚染(青山学院大理工・東京国立文化財研)。平尾良光・馬淵久夫

A会場 (13:00~17:00)

課題講演I〔海洋の化学〕—海洋の理解と資源・環境問題への化学的側面からのアプローチ

コンビーナー 角皆静男

本シンポジウム開催の意味(北大)角皆静男

- 1 A 12 海洋の誕生と進化(東工大)松尾禎士
- 1 A 13 海水の物理的動きと化学成分・日本海深層水の循環を例にして(東大)蒲生俊敬
- 1 A 14 海洋の環境化学(地調)松本英二
- 1 A 15 海底鉱物資源・硫化鉱物の生成(富山大)日下部実
- 1 A 16 マンガン団塊は転がるか(南加州大)日下部正志

1 A 17 生物生産と化学成分との相互作用・赤潮問題に関する新解釈(北大)角皆静男

総合討論、海洋化学への期待 司会 半田暢彦(名大)

B会場

一般講演 (9:00~10:15) 座長 清水 洋

- 1 B 01 地質調査所発行の8種の標準岩石試料とその化学組成(地調)安藤 厚
- 1 B 02 ケイ酸塩試料中のストロンチウムの含有量(甲南大理)玉利祐三・辻 治雄・日下 謙
- 1 B 03 本邦火山岩の硫黄含有量(日女大・東工大理・埼玉大工・日本工業用水協会)蟻川芳子・。吉田 稔・小沢竹二郎・岩崎岩次
- 1 B 04 須恵器胎土からみた東日本と西日本(奈良教育大)三辻利一
- 1 B 05 西南日本の花崗岩の放射化分析(1)中国地方(大阪府大・奈良教育大・京大)。増田康之・八木伸二郎・三辻利一・西村 進
- (10:30~12:00) 座長 中村裕二
- 1 B 06 希土類元素およびバリウム存在度からみた酸性火成岩類(神戸大教養・東大理)。寺門靖高・増田彰正
- 1 B 07 第四紀テフラと微量金属類について(北海道公害研)藤田隆男
- 1 B 08 北関東ローム層の化学成分(群馬衛公研・群馬大教)。斎藤武夫・飯塚俊彦・氏家淳雄・新井房夫
- 1 B 09 浅間山1982年4月活動における火山灰の付着成分(東工大)。小坂丈予・平林順一
- 1 B 10 北関東、赤城山のストロンチウム同位体異常(筑波大・東大理)。野津憲治・山口尚志
- 1 B 11 老岐島火山岩類の微量元素(京大教養)池田 隆

(13:00~14:00) 座長 田中 剛

- 1 B 12 無人岩中の塩素と水の起源(愛知教育大・山口大理・静岡大理)。浦野隼臣・白木敬一・黒田 直
- 1 B 13 小笠原諸島 Boninite の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 比とその起源(筑波大・東大理)。野津憲治・綱川秀夫
- 1 B 14 ソロモン群島の火山岩中の希土類元素について(神戸大理・東大理・名大理)。河田陽介・増田彰正・杉崎隆一
- 1 B 15 インドネシア・アンボン島の火山岩について(京大理・京大教養・Lipi)西村 進・池田 隆・F. Hehuwat

(14:00~14:45) 座長 浦野隼臣

- 1 B 16 インド・デカン玄武岩類のSrの同位体比(地調・東大震研・インド地質調)。倉沢 一・荒牧重雄・S. S. Deshmukh
- 1 B 17 中部アンデス火山岩の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ (筑波大)野津憲治
- 1 B 18 La—Ce 法およびSm—Nd 法によるアフリカ Bushveld はんれい岩の年代(地調・東大理)。田中 剛・増田彰正
- (15:00~15:45) 座長 佐竹 洋
- 1 B 19 日本海プルームとガスフィールドの形成(東大理)。脇田 宏・佐野有司
- 1 B 20 ヘリウム同位体からみた島弧のテクトニクス(東大理)。佐野有司・中村裕二・脇田 宏
- 1 B 21 プレート沈み込みによって生じるマンツルの渦と縁海の形成(大阪府大総合)伊藤英文・。増田康之・木下 修

(15:45~17:00) 座長 野津憲治

- 1 B 22 Soil Gas 中の水素、二酸化炭素濃度(国立防災科学技術センター)吉田則夫
- 1 B 23 活断層から放出される土壌炭酸ガスの炭素同位体比(富山大理)。林 美光・佐竹 洋・水谷義彦
- 1 B 24 伊豆・東海地域における溶存ガス組成変化と地震活動(地調)。吉川清志・永田松三・高橋 誠
- 1 B 25 山崎断層、塩田温泉の水質変動と地震活動(京大防災研)吉岡龍馬・。小泉尚嗣
- 1 B 26 時系列データの統計的解析(II)(東大理)。中村裕二・脇田 宏

C会場

一般講演 (9:00~10:15) 座長 日下部実

- 1 C 01 茨城県下の第四紀堆積物の化学組成(地調)。金井 豊・坂本 享・安藤 厚
- 1 C 02 琵琶湖の無機環境Ⅲ、堆積物表層への種々の元素の濃縮機構(国立公害研・滋賀大教育・京大原子炉)高松武次郎・川嶋宗継・小山睦夫
- 1 C 03 琵琶湖の無機環境Ⅳ、南湖浚渫地で起る化学反応(滋賀大教育・国立公害研・京大原子炉)。川嶋宗継・原 博一・板坂 修・堀太郎・高松武次郎・小山睦夫
- 1 C 04 粘土鉱床におけるモンモリロナイト鉱物生成に伴う成分変化の傾向(東工大・住友セメント)。小坂丈予・岡田 清・平林順一・加藤昌宏

1 C 05 沖縄島泥灰岩地域における化学的風化量(沖縄理化学工業研究所)遠山英一

(10:30~12:00) 座長 平良初男

- 1 C 06 日本型ヨウ素鉱床の地球化学(地調)。福田 理・永田松三
- 1 C 07 堆積岩中での硫黄の移動と二硫化鉄の生成(地調)狛 武
- 1 C 08 立山地獄谷綫状硫黄堆積物の生成環境(富山大理・岡山大温研)。日下部実・林 尚美・三好 正
- 1 C 09 阿寒湖柱状堆積物の化学状態から見た堆積環境(道公害研・東海大札幌)。坂田康一・石井次郎
- 1 C 10 貯水池堆積物からの栄養塩および重金属元素の溶出(電力中研)坂田昌弘
- 1 C 11 三方五湖における ^{137}Cs の堆積挙動(金沢大理)。寺田喜久雄・林 徳幸
- (13:00~14:15) 座長 平木敬三

- 1 C 12 宅地開発にともなう宮崎層群の東市崩壊の機構(京大防災研・南九大園芸・京大理)。吉岡龍馬・高谷精二・神山孝吉
- 1 C 13 無定形ケイ酸の溶解速度およびその溶解速度に影響する因子(島根大理・名大水圏研)。奥村 稔・北野 康
- 1 C 14 質量分析計によるモノアイソトピック元素Hoの定量(神戸大自然科学・東大理)。川上 紀・増田彰正
- 1 C 15 大分県稲積鍾乳洞の地下水について(九大理)。吉村和久・樽谷俊和
- 1 C 16 安定同位体及びトリチウムから見た富山地方の陸水(富山大理)。佐竹 洋・小田松尚・亀谷寛人・水谷義彦・日下部実

(14:30~15:45) 座長 奥村 稔

- 1 C 17 地中水組成の時系列変化(名工試)渡辺栄次
- 1 C 18 富山県庄川扇状地地下水の流動状況(富山大理)。水谷義彦・小田松尚
- 1 C 19 沖縄の都市河川における物質の動き(Ⅱ)(琉球大理)。渡久山章・髙原 哲
- 1 C 20 熊本県白川上流域の河川水質(熊本県衛生公害研究所)植木 肇
- 1 C 21 琵琶湖およびその周辺河川におけるモリブデンについて(近畿大理工・教養)。平木敬三・中村陽一・室中康利・重松恒信
- 西川泰治

- (15:45~17:00) 座長 渡久山章
- 1 C22 クロロフィルcの遅延蛍光分析法と植物プランクトン中のクロロフィルa, b, cの分布について(近畿大理工・教養)。尾上義明・芳竹良彰・西川一代・平木敬三・西川泰治・重松恒信
- 1 C23 水圏におけるセレンの状態について(近畿大理工・教養)平木敬三・。福永裕三・西川泰治・重松恒信
- 1 C24 河川の水及び堆積物の重金属の存在形態(山形大理)。入江敏勝・奥山日出雄・佐藤昌宏
- 1 C25 河川水中の粘土鉱物による金属の取り込み量と有機物濃度について(都立大理)。小椋和子・本波裕美
- 1 C26 霞ヶ浦高浜入における底泥からのリンの回帰について(国公研)。河合崇欣・大槻 晃・相崎守弘・西川雅高

D会場

- 一般講演 (9:00~10:15) 座長 小村和久
- 1 D01 南極ドライバレー地域の塩湖のホウ素分布(横浜国大・京大・千葉工大)村山治太・由佐悠紀・鳥居鉄也
- 1 D02 南極ライト谷湖沼群における微量元素の起源(北大水産・日本分析センター)。増田宣泰・西村雅吉・鳥居鉄也
- 1 D03 南極ドンファン湖盆の水溶性の塩類中の微量元素について(名大水圏研)。富山千里・北野 康
- 1 D04 南極ドンファン池の湖底堆積物中のCa, Mg, Fe, Mnの分布と存在状態(名大水圏研)。富山千里・北野 康
- 1 D05 ドライバレー, テイラー谷のアラゴナイトについて(弘前大理・金沢大理・千葉工大)。中谷 周・箕浦幸治・大村明雄・鳥居鉄也
- (10:30~11:45) 座長 村山治太
- 1 D06 南極 Polar Plateau 末端域の湖沼群—南極塩湖の塩起因に関連して—(千葉工大・弘前大理・京大理・横浜国大教・都立大理)。鳥居鉄也・中谷 周・由佐悠紀・村山治太・松本源喜
- 1 D07 南極ドライバレー地域の湖沼堆積物中のオキシカルボン酸(都立大理・千葉工大)。松本源喜・鳥居鉄也・半谷高久
- 1 D08 昭和基地周辺地域の岩石地球化学(秋大教育) 椎川 誠・。久保田秀紀

- 1 D09 各種南極試料中の天然および人工放射性核種(金沢大理)。小村和久・柳沢美樹男・林 巧・阪上正信
- 1 D10 ペンギン生態系の窒素同位体組成(三菱化成生命研・東大海洋研・Univ. of Illinois・千葉工大)。和田英太郎・水谷 広・小池勲夫・A. L. Devries・鳥居鉄也
- (13:00~14:30) 座長 加藤喜久雄
- 1 D11 地表付近における大気中二酸化炭素の含量(気象研)伏見克彦
- 1 D12 弘前市におけるエロゾルの化学成分(弘前大理)。中谷 周・田中 玲
- 1 D13 大気を通しての陸起源物質の輸送, その1, 黄砂の有機成分(名大水圏研)大田啓一
- 1 D14 西部北太平洋域における大気中の²¹⁰Pbのネットワーク観測(北大水産)。倉田隆嘉・角皆静男
- 1 D15 西部北太平洋域における大気中のSi, Fe, Mn, Al 濃度(1981年3~9月)(北大水産)角皆静男・。鈴木利孝・倉田隆嘉
- 1 D16 高速道路ぎわで採取した降下物の環境化学的特徴(東工大総合理工)。鶴見 実・一國雅巳
- (14:30~15:45) 座長 大田啓一
- 1 D17 雨水中の溶存酸素含量について(気象研・地化協)。櫻井澄子・三宅泰雄・猿橋勝子
- 1 D18 降水中微量成分の時間変動(国立公害研・日大文理)。安部喜也・西川雅高・須藤智光
- 1 D19 東京都における大気中の重金属濃度と降水の関係(都立大理)。信楽義夫・半谷高久
- 1 D20 台風時における降水の安定同位体比及び化学成分の変化(東京農工大農)。丹野忠弘・小倉紀雄
- 1 D21 降水中のトリチウムの緯度変化(北大水産)角皆静男・石田宗博・。倉田隆嘉
- (15:45~17:00) 座長 伏見克彦
- 1 D22 56豪雪期の日本海沿岸地域における降雪の酸素同位体組成(名大水圏研)。加藤喜久雄・渡辺興亜・樋口敬二
- 1 D23 永久凍土中の氷体の酸素同位体特性(I)(名大水圏研・北大低温研)。加藤喜久雄・福田正己・藤野和夫
- 1 D24 大気中のN₂Oの¹⁵N/¹⁴NとN₂Oの循環過程での窒素同位体分別(東工大大理)。吉田尚弘・山崎 岳・松尾禎士
- 1 D25 土壌炭酸ガスの植物の同化作用に対する寄与(学習院大理)。垣内信子・白木麻里・木越邦彦

- 1 D26 炭素同位体比からみた先カンブリア時代の大気中二酸化炭素濃度(三菱化成生命科学研)水谷 広・和田英太郎

第2日 10月19日(火)

A会場

- 一般講演 (9:00~10:15) 座長 乗木新一郎
- 2 A01 東京湾における堆積(地調)松本英二
- 2 A02 沿岸堆積物中の微量元素について(近畿大理工)合田四郎・。山崎秀夫
- 2 A03 沖縄本島東部海域, 金武湾底質における重金属濃度の推移(琉球大理)。安西聖依・平良初男・兼島 清
- 2 A04 中部太平洋深海底堆積物の微量化学成分(地調)。三田直樹・中尾征三
- 2 A05 マンガン団塊の研究(XV)地球化学探査法について(理研)。島 誠・杉原滋彦
- (10:30~12:00) 座長 合田四郎
- 2 A06 マンガン団塊表面のトリウム同位体とトリウムの2つの供給源(北大水産)角皆静男・藤井慎二・山田正俊
- 2 A07 日本海深海底堆積物中の還元態硫黄の沈積にともなう微量元素の挙動(名大水圏研・京大原子炉)。増沢敏行・小山睦夫
- 2 A08 嫌氣的沿岸堆積物に沈着するウラン(北大水産)角皆静男・鈴木一成・。山田正俊
- 2 A09 U, Th, ²¹⁰Pb による海溝底堆積物の起源の研究(北大水産)。山田正俊・角皆静男
- 2 A10 沈降粒子, 懸濁物, プラントン, およびフィークルペレットの化学組成の特徴(北大水産)乗木新一郎・。石森則人・角皆静男
- 2 A11 海洋表層からの重金属元素の除去にはたす生物起源粒子の役割(北大水産)。乗木新一郎・石森則人・角皆静男
- (13:00~14:00) 座長 中西 孝
- 2 A12 深海用時間分画式セジメントトラップの試作と粒子束の日変化(北大水産)。乗木新一郎・石森則人・原田 晃・角皆静男
- 2 A13 噴火湾における沈降粒子中の²³⁴Thの季節変動(北大水産)角皆静男・。田口和典・原田 晃
- 2 A14 噴火湾における沈降粒子中の²¹⁰Pb, ²¹⁰Po: 海底から鉛は溶出するか(北大水産)。原田 晃・角皆静男
- 2 A15 北西太平洋深海に係留したMn・ファイバーによって得られたThの同位体組成(東大海洋研)野崎義行

- (14:00~15:00) 座長 野崎義行
- 2 A16 西部北太平洋における^{239,240}Puの鉛直濃度分布と存在形態(金沢大理・東京歯科大)。中西 孝・石川篤子・竹井美智子
- 2 A17 西部北太平洋底層水中の過剰ラドンの分布と挙動について(東大海洋研)。蒲生俊敬・堀部純男
- 2 A18 マリアナトラフの深海底熱水(東大海洋研)堀部純男
- 2 A19 ガラバゴス海嶺における海底基盤の熱水変質(東大海洋研・東大理)。川幡穂高・鹿園直建
- [総会] 19日(火) —(15時から)—教養205教室
- 特別講演 —(16時から)—
- 沖縄の島のでき方(琉球大理)木崎甲子郎

B会場 (9:00~12:00)

- 課題講演II〔岩石と水の相互作用〕
- コンビーナー 酒井 均
- 2 B01 水—岩石相互作用における二次鉱物スメクタイトの反応性(函館工専・Penn State)。水上正勝・大木 洋
- 2 B02 熱水条件下における硫酸の水素による無機還元と硫黄同位体の挙動(岡山大温研)。柳沢文孝・酒井 均・木島宣明
- 2 B03 熱水溶液の f_{H_2} の測定とその応用, IV, NaCl 溶液中の f_{H_2}/CH_4 (岡山大温研)。木島宣明・酒井 均
- 2 B04 酸性溶液による岩石の溶出変化(東邦大理)吉池雄蔵・岡村 忍・岩崎岩次
- 2 B05 溶出実験からみた花崗岩の風化速度のモデルについて(京大防災研・京大理・筑波大地球)。吉岡龍馬・飯田智之・松倉公憲・八田朔郎
- 2 B06 地下水の水質と地質—特に有馬層群について(甲南大理)。日下 譲・辻 治雄・玉利祐三・竹内慶行・西田直也・西村公男
- 2 B07 地表水の化学的性質と集水域の地質との関係(日大文理)佐藤キエ子
- 一般講演 (13:00~14:00) 座長 松葉谷 治
- 2 B08 溶存硫酸—水系の酸素同位体交換反応速度(岡大温研)。千葉 仁・酒井 均
- 2 B09 BaSO₄ 熱分解法による硫黄同位体測定用SO₂の抽出法(岡大温研)。柳沢文孝・酒井 均
- 2 B10 NaCl メルト及びKCl—LiCl メルト中におけるSO₄²⁻—S²⁻間の硫黄同位体分別係数(岡大温研)。三好正・酒井均・千葉仁

- 2 B11 沸石の酸素同位体比に関する予備的研究
(富山大理)。米谷正広・日下部実
(14:00~15:00) 座長 千葉 仁
- 2 B12 火山ガラス中の水の酸素同位体比について
(秋田大鉱山・室工大開発工学)
。松葉谷治・白幡浩志
- 2 B13 溶出実験による食塩泉泉質についての考察
(大阪市大) 益田晴恵
- 2 B14 含ケイ素鉄質沈殿物について (九大理)
。梶 博幸・横山拓史・樽谷俊和
- 2 B15 フローインジェクション分析法による地熱熱
水中のケイ酸の定量 (九大理)
。横山拓史・樽谷俊和

C会場

- 一般講演 (9:00~10:15) 座長 粕 武
- 2 C 01 内湾性及び湖底堆積物による古気候及び古水
準の研究 (名大理)。中井信之・高橋正明
- 2 C 02 琉球諸島植物中の微量元素の生物地球化学的
研究 (京大原子炉・京大農・琉大演習林)
小山睦夫・高田実弥・松下録治・白川正弘・
片山幸士・新里孝和
- 2 C 03 ^{14}C 液シン年代測定による第4紀海水準変動
の研究 (金沢大理) 阪上正信・。松崎 栄
- 2 C 04 後背地の塩基性・酸性岩比の指示者としての
堆積岩のクロム (山口大理) 白木敬一
- 2 C 05 中国運城塩湖の概況 (千葉工大・北大理・京
大理・弘前大理)。鳥居鉄也・中尾欣四郎・
由佐悠紀・中谷 周
(10:30~12:00) 座長 吉田 稔
- 2 C 06 ヘリウム同位体比の精密測定 (東大理)
。佐野有司・中村裕二・脇田 宏
- 2 C 07 化学組成からみた天然ガスの地域的特徴
(東大理)。卜部明子・富永 健・中村裕二・
脇田 宏
- 2 C 08 御岳火山, その後のガス成分の変遷
(東工大・埼玉大・東工大)。小坂丈予・小沢
竹二郎・平林順一
- 2 C 09 低温噴気帯における火山ガス測定 (雙葉高)
高江洲 登
- 2 C 10 火山, 温泉ガスと花崗岩中の希ガス同位体組
成 (岡山理大)。長尾敬介・緒方惟一
- 2 C 11 火山ガス中の微量成分 (鹿児島大理)。鎌田
政明・坂元隆己・竹内真二・安部光太郎
(13:00~14:00) 座長 大出 茂
- 2 C 12 炭酸カルシウムによるアルカリ金属イオンの
共沈殿 (島根大理・名大水圏研)

- 。奥村 稔・北野 康
- 2 C 13 ナトリウムとカリウムの方解石への分配
(東工大総合理工)。石川正道・一國雅巳
- 2 C 14 生物性炭酸塩殻におけるマグネシウムの分布
(名大水圏研) 金森 悟・金森暢子・北野 康
- 2 C 15 アラゴナイトのカルサイト化に関する共存イ
オンの影響 (東海大理)
。香山 勲・河野精文・伊藤直之
(14:00~15:00) 座長 藤貫 正
- 2 C 16 水溶液中での aragonite から calcite への
転移に伴う微量元素の挙動 (愛教大・名大
水圏研)。吉岡小夜子・北野 康・金森暢子
- 2 C 17 サンゴ (アラゴナイト) のカルサイトへの変
質過程における少量成分の挙動 (琉球大理・
名大水圏研)。大出 茂・朝倉則廣・北野康
- 2 C 18 化石貝殻のウラン濃度と Io 年代 (学習院大
理) 満田 伯
- 2 C 19 海水環境におけるプロトドロマイトの合成実
験 (琉球大理) 大森 保

D会場

- 一般講演 (10:00~11:00) 座長 川辺岩夫
- 2 D01 220nm 吸収を示す炭素質物質の合成: 減光
をひき起こす星間物質とその構造 (その1)
(電通大・東大)。坂田 朗・和田節子・奥津
佳之・新谷治生・中田好一
- 2 D02 炭素質物質による星間減光曲線のベースライ
ンの説明: 減光をひき起こす星間物質とその
構造 (その2) (電通大・東大理)
。和田節子・坂田 朗・橋本 満・尾中 敬
- 2 D03 酸化〜還元大気中における原始アミノ酸の生
成 (神奈川大・自治医大)。服部ゆう子・石
神正浩・金城政孝・長野 敬
- 2 D04 ^{14}C による南極隕石の落下年代の測定 (学習
院大理)。松田悦子・木越邦彦
(11:00~12:00) 座長 坂田 朗
- 2 D05 太陽炉による玄武岩及び隕石物質の蒸発実験
(シカゴ大・ヒューストン大・愛媛大理)
。川辺岩夫・G. J. Macpherson・
L. Grossman・E. A. King
- 2 D06 Murchison (C2) に含まれる refractory
inclusions の化学組成 (シカゴ大・愛媛大
理・地調)。川辺岩夫・田中 剛・
L. Grossman・A. M. Davis
- 2 D07 種々の酸素分圧下での希土類元素の気相一固
相分配 (学習院大) 長沢 宏

- 2 D08 重力下における気体の平衡状態 (学習院大理)
木越邦彦
(13:00~14:00) 座長 福岡孝昭
- 2 D09 本邦に落下した球粒いん石中の宇宙線の記録
(科博・理研・山形大理)
。島 正子・矢吹貞代・高岡宣雄
- 2 D10 Chassigny 隕石の年代 (I) (神戸大理・岡
山大温研)。中村 昇・加々美寛雄
- 2 D11 Chassigny 隕石の化学組成 (特に微量元素
について) (II) (神戸大理)
。古味秀人・中村 昇
- 2 D12 Chassigny 隕石の母天体一火星起源? (Ⅲ)
(神戸大理・地調・岡山大温研)。中村 昇・
古味秀人・松久幸敬・加々美寛雄
(14:00~15:00) 座長 中村 昇
- 2 D13 南極ユークライトの希土類元素パターンの特
徴 (東大理)。清水 洋・増田彰正
- 2 D14 ALH-765, -77302 複合ユークライト隕
石の構成物質中の希土類元素と親鉄元素 (学
習院大理)。池田和隆・福岡孝昭
- 2 D15 始源的エコンドライト隕石 (南極ヤマト隕石)
の化学組成 (学習院大理)
。福岡孝昭・池田和隆
- 2 D16 微量元素分析に基づく C1 コンドライトの始
原性の考察 (群大教養・シカゴ大)
。海老原充・B. アンダース

第3日 10月20日 (水)

A会場

- 一般講演 (9:00~10:15) 座長 藤原祺多夫
- 3 A01 古代海水中の化学状態の推定法—海生鉱物・
海水間の元素の分配平衡 (学習院大理・名大
水圏研)。垣内正久・長沢 宏・北野 康
- 3 A02 東京湾堆積物中のコプロスタノール (東京農
工大農)。小倉紀雄・市川陽子
- 3 A03 界面活性な物質としてのフミン酸とフルボ酸
(広大総科)。早瀬光司・坪田博行
- 3 A04 湖沼における有機物の形成—脂質成分の日変
化 (名大水圏研・筑波大生科)
新村陽一・。半田暢彦・浜 健夫
- 3 A05 海洋における沈降粒子と懸濁粒子の脂質成分
について (名大水圏研)。松枝秀和・半田暢彦
(10:30~11:45) 座長 小倉紀雄
- 3 A06 海水の溶存態および懸濁態多糖類の化学構造
について (名大水圏研)。佐久川弘・半田暢彦
- 3 A07 海水の溶存多糖類の化学構造について
(名大水圏研)。佐久川弘・半田暢彦

- 3 A08 天然水中の溶存酵素 (ペプチターゼを中心とし
て) (東大理)。藤原祺多夫・橋本伸哉・小林
憲正・原口紘丞・不破敬一郎
- 3 A09 生体内微量元素の分布について (魚の臓器を
中心として) (都立大理・東ア研)
。寺井 稔・谷崎良之
- 3 A10 海洋生物性物質の元素分布の特徴 (京教大)
。山本俊夫・大塚由紀子・岡本健一
(13:00~14:00) 座長 坂元隼雄
- 3 A11 泉質による温泉・鉱泉の地理的分布 (東邦大
医化)。相川嘉正・加藤尚之・塚本邦子
- 3 A12 有機質に富む温泉沈殿物 (東北大教養)
鈴木励子
- 3 A13 群馬県星尾鉱泉の化学成分と沈殿物 (実験室
内) について (群馬衛公研・東北大教養)
。酒井幸子・関 茂雄・飯塚俊彦・氏家淳雄
鈴木励子
- 3 A14 草津白根火山水釜の再形成とその水質の由来
(東工大・上智大)。小坂丈予・野村昭之助・
小坂知子・仲程 剛
(14:00~15:00) 座長 鈴木励子
- 3 A15 異常に大きい $^{234}\text{U} / ^{238}\text{U}$ 比をもつ辰口温泉
水およびその周辺地下水の研究 (金沢大理
LLRL)。阪上正信・林 巧
- 3 A16 熊本県日奈久温泉の湧出流動状況 (中央温泉
研) 佐藤幸二
- 3 A17 地球化学的に見た豊肥地域の地熱構造
(地調) 野田徹郎
- 3 A18 地熱流体中の水銀, ヒ素, アンチモン (鹿児
島大理) 坂元隼雄・鎌田政明

B会場

- 一般講演 (9:00~10:15) 座長 下山 晃
- 3 B01 ベンゼン—液体シンチレーションによる ^{14}C 年
代測定 (地調)。富樫茂子・松本英二
- 3 B02 湯の湖柱状堆積物中の炭水化合物 (都立大理)
。鶴崎 実・石渡良志
- 3 B03 有機物腐植化過程におけるトランス-4-ヒド
ロキシ桂皮酸の関与—泥炭土壌の例 (神奈川
県立衛生短期大学・帯広畜産大環境土壌)
。片瀬隆雄・近藤錬三
- 3 B04 池堆積物中のトランス-4-ヒドロキシ桂皮
酸とその変遷過程の考察 (神奈川県立衛生短
期大学) 片瀬隆雄
- 3 B05 環境中におけるシス-4-ヒドロキシ桂皮酸の存
在と意義 (神奈川県立衛生短期大) 片瀬隆雄

- (10:30~12:00) 座長 片瀬隆雄
- 3 B06 2層分配法によるアモルファスケロジェンの分離とその特質(島根大理) 鈴木徳行
- 3 B07 炭酸塩堆積物中の有機物の特質—アブダビ沖後期白亜紀炭酸塩岩を中心として(東北大理)。田口一雄・森 一司
- 3 B08 新庄盆地新第三系の堆積岩有機物の安定炭素同位体比(筑波大化・秋田大鉱山)。
・下山 晃・松葉谷治
- 3 B09 新庄油田地域堆積岩中の環状炭化水素化合物(都立大理)。塩谷 真・石渡良志
- 3 B10 油頁岩中 Kerogen の熱分解による解析(都立大理)。福島和夫・町原 勉・石渡良志
- 3 B11 堆積高分子有機物の酸化分解 I, 低分子生成物について(都立大理)。
・森永茂生・山本修一・石渡良志
- (13:00~13:45) 座長 鈴木徳行
- 3 B12 堆積物中のペリレンキノン類定量法の再検討(都立大理)。松下哲也・石渡良志
- 3 B13 東京湾堆積物中の多環芳香族炭化水素の分布に関する考察(都立大理・地調)。尹順子・塩谷 真・石渡良志・松本英二
- 3 B14 汚染堆積物中のアルキルベンゼン類の存在とその意義(都立大理)。石渡良志・高田秀重
尹 順子
- (14:00~15:00) 座長 福島和夫
- 3 B15 汚染環境堆積物中の重金属の状態について(都立大理・地調)。向井健一郎・阿部 宏・金武隆・福島和夫・石渡良志・松本英二
- 3 B16 東京都物質系における石油物質の存在と流れ(都立大・東京都・青山学院大・慶応大・農工大)。半谷高久・大石堪山・許萬元・福島和夫・大竹千代子・松田雄孝・柏木祐一・秋山紀子・本波裕美・本谷 勲
- 3 B17 層状放散虫チャートの起源—その I (弘前大理)。箕浦幸治・中谷 周
- 3 B18 層状放散虫チャートの起源—その II (弘前大理)。箕浦幸治・中谷 周

C会場

- 一般講演 (9:00~10:00) 座長 大森 保
- 3 C01 石垣島川平湾におけるカルシウムの収支(琉球大理・名大水圏研)。
・大出 茂・阿部洋巳・北野 康
- 3 C02 放射化分析による琉球石灰岩及び標準試料の微量成分(琉球大理・京大原子炉)。平良初男・兼島清・大森保・小山睦夫・高田実弥

- 3 C03 日本の炭酸塩岩石の平均化学組成(地調)。
・藤貫 正・五十嵐俊雄
- 3 C04 パキスタンの中・古生代炭酸塩岩の化学成分と堆積環境(香川大教育)。稲積章生・坂東祐司・香川智津子・琢磨一代
- C会場 (10:15~12:00)
課題講演Ⅲ〔サンゴ礁の地球化学〕
コンビーナー 小西健二
- 3 C05 八放サンゴの方解石とアラレ石(サントリー有機生物科学研) ミュジーク・キャサリン
- 3 C06 イシサンゴ骨格年代学による表層海水中の溶存無機炭素の炭素同位体比の経年変動(金沢大理) 田中武男・小西健二
- 3 C07 イシサンゴ骨格中の微量成分分布からみた海水化学組成の変動(名大水圏研)。
・北野 康・池野知子
- 3 C08 地質時計としての化石サンゴ—I。法から非破壊法まで—(金沢大理)。
阪上正信・小村和久

- (13:00~15:00)
課題講演Ⅲ〔サンゴ礁の地球化学(つづき)〕
- 3 C09 サンゴ礁における海水下の膠結作用(金沢大理) 二口克人・小西健二
- 3 C10 プロトドロマイトの分布と生成環境(琉球大理・名大水圏研)。
大出 茂・朝倉則廣・北野 康
- 3 C11 3000年前に隆起したサンゴ礁より発見されたドロマイト(金沢大理) 小西健二
- 3 C12 南大東産炭酸塩岩の微量重金属元素含量(群馬大工) 赤岩英夫・相沢省二
- 3 C13 微量成分からみた琉球石灰岩の特性(琉球大理・京大原子炉研)。兼島 清・小山睦夫・平良初男・大森 保・高田実弥

D会場

- 一般講演 (9:00~10:15) 座長 森岡正名
- 3 D01 含ヒ素硫化鉄鉱の酸化分解機構の検討—鉄硫黄の挙動態様—(岩手大工)。
・梅津芳生・後藤達夫・浅部喜幸
- 3 D02 含ヒ素硫化鉄鉱の酸化分解機構の検討—ヒ素の挙動態様—(岩手大工)。
・浅部喜幸・後藤達夫・梅津芳生
- 3 D03 非晶質ケイ酸マンガニ(Ⅱ)の合成とその性質(九大理)。楫 博幸・樽谷俊和
- 3 D04 黒鉱伴生岩における元素分布(金沢大理)。
・岡田喜久雄・菊井正明・清水隆夫・坂本浩

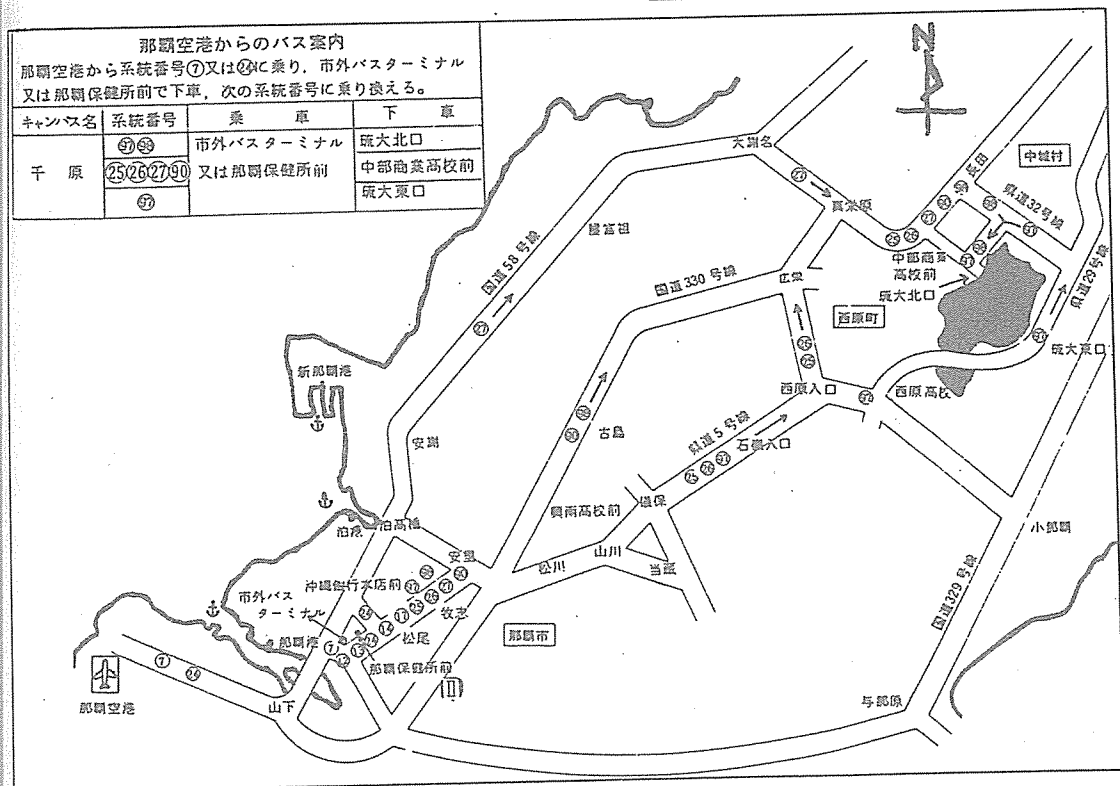
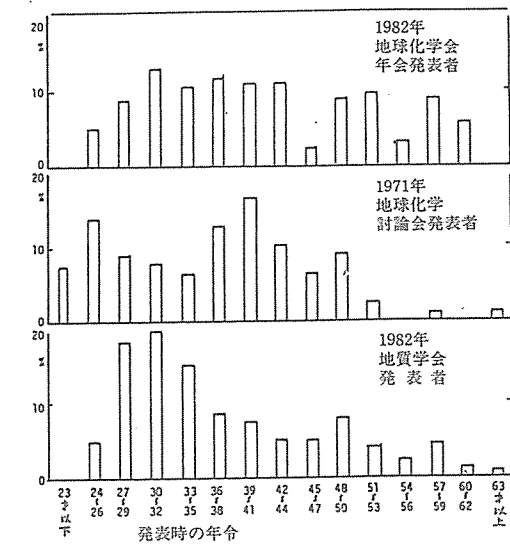
- (10:30~12:00) 座長 野田微郎
- 3 D06 本邦の花崗岩系鉱床の鉛同位体的特徴(東大震研・地調)。佐藤和郎・佐々木 昭
- 3 D07 方鉛鉱・閃亜鉛鉱間のセレンの分配(岡山大理)。山本雅弘・氏平克司・遠藤三紀也
- 3 D08 マントル構成鉱物中の揮発性成分(東工大理)。
・三島和展・渡辺修一・松尾禎士
- 3 D09 ホウ砂における水素同位体の結晶内席選択(東工大理)。T. M. Pradhananga・松尾禎士
- 3 D10 Searles Lake (Calif. U. S. A.) 岩塩の流体包有物(東工大理)。堀田十輔・松尾禎士
- 3 D11 オリビン結晶中に於けるトレーサー拡散係数の測定(東大 RI センター・学習院理)。森岡正名・長沢 宏・伊藤理恵子・滋野真弓

講演要旨集 当日価 3,800 円(送付のみ可)
連絡先 〒903-01 沖縄県西原町字千原1番地
琉球大学理学部化学科 1982年度日本地球化学会
年会実行委員会 兼島 清
電話 09889-5-2221 内線 2656, 2657, 2654

1982年度 日本地球化学会年会 もう1つのデーター

本年会も年毎に発表が増えていくようで、うれしい事です。会員名簿を参考に学会発表者(演者)の年齢別頻度分布を作りました。比較のために11年前(1971年度)の地化討論会と本年(1982年)の地質学会の発表者年齢別頻度分布図も作りました。

さてこの解釈は? — ニュース係 —
本作業には東大化学 佐藤のぞみさんの助けをいただきました。



(財政状態の現状—会費値上げと関連して)

1) 1983年度の予算の概略

1) - a 収入

1982年6月現在の正会員(会費6,000円)784名、学生会員(会費4,000円)24名、賛助会員(会費15,000円)14名から入金しうる可能金額は5,010千円、納入率を85%とすると会費納入期待額は4,260千円である。(1982年6月現在の長期会費滞納者は51名、金額にして約800千円である滞納者からの会費納入を500千円とみつもる。)

Geochemical Journal (G. J.) は毎号1530部印刷し、各号2,300円で約350部(1981年実績: 外国266, 国内60)が国内外の図書館などで購入されるが、日本学会事務センターで手数料を40%とられる。G. J. は毎年6回発行されるから、 $2,300 \times 6 \times 350 \times 0.6 \approx 2,900$ 千円の収支がみこまれる。日本語の地球化学(地化)は毎号1,000部印刷され、約70部が単価1,800円で図書館などで購入される。その結果、 $1,800 \times 2 \times 70 \times 0.6 \approx 150$ 千円の収入がみこまれる。文部省からの出版助成金は1,500千円が予定されている。また1982年度からの繰越金を880千円とみると、期待収入額は約10,190千円、先程死去された菅原 健名誉会員の御遺族からいただいた寄附金300千円を加えて約10,490千円である。

1) - b 支出

会誌印刷はVol. 15の実績にもとづいて、G. J. が4,600千円、地化が1,180千円およびニュース30千円が予定される。これらの発送費に800千円を要する。編集費はG. J. 800千円、地化102千円と緊縮予算が計上されている。年会・例会費用は320千円があてられている。日本学会事務センターへの事務委託費は1,400千円という巨額である。その他庶務費300千円; 会議費300千円; 通信費150千円; 選挙費250千円; 旅費780千円および雑費50千円を総計すると約11,510千円となる。

2) 収支のバランス

上にのべたように、寄附金を除くと1983年度の収入は1982年からのかなり楽観的な繰越金額を含めても支出予定を約1,000千円下まわることになる。もとより繰越金を残す余裕はない。しかも収支のみつもりに是不確定要素がある。例えば印刷費の値上りはみこんでいない。従ってこのまゝでは1983年度の終りは本会の財政状態は危機的なものになるおそれがある。

3) 財政健全化の方策

3) - a 収入増

G. J. の図書館ないしは個人購読部数を増やすことと単価を値上げすること。一案として部数を現在の350部から400部に増やし、単価を2,300円から2,800円にすると、1) - a でのみつもりより約

1,100千円増がみこまれる。この試算を絵に書いた餅に終らせないためには、Vol. 15までの論文リストを作り、注文票を附した紹介パンフレットを作って配布するなどの積極策が必要である。また文部省からの出版助成金はこのまゝでは1,500千円で頭打ちの状態が十分考えられるので、特定欧文誌(出版費の高率補助)への昇格を努力するなどの方策も考えられる。一方、G. J. および地化掲載論文に対してページチャージをとることも検討の余地がある。

会員増については必ずしも楽観的な見通しを持ってない。しかしこの問題は本会の基本姿勢にもかかわることなので、こゝでは触れることはできない。学会誌あるいは年会要旨集に広告を掲載して広告料をとることも考えられている。

3) - b 支出減

G. J. が一冊売れるごとに日本学会事務センターに40%の手数料をとられている。この手数料を低くできるか否かは、事務を委託している学会の結束にかかっている。現在G. J. は毎号1530部を印刷しているが毎号約300部の残部が出る。バックナンバーとして保存するにはこの部数は多すぎるので、購読数が増加するまでは印刷部数をかりに200部へらすと費用としては約200千円減にしかならないが、日本学会事務センターから請求されている保管料(約170千円)を増やさないという消極的利得がある。

名簿印刷は700千円を要するが、名簿印刷を2年に一度を4年に一度にへらすことによって毎年約180千円節約できる。その他執行部の諸経費の緊縮化は言うまでもないが、学会事務センターへの事務委託費1,400千円と、学会誌購読手数料(1981年度実績)約1,800千円($2,300 \times 6 \times 320 \times 0.4$)は本会収入の約3割に当たる。事務委託の得失について再考すべき時期にあるといえよう。

4) おわりに

以上のべたように、近い将来の財政の見通しは楽観を許さない。一方、収支に関しての財政健全化の方策は必ずしも速効的とはいえないものばかりである。1983年度あるいは1984年度に会費値上げが避け難い現状に関して会員諸賢の御理解と御協力を切望する次第である。かりに正会員費を8,000円、学生会費を5,000円にしたときには、納入率85%として約1,350千円の増収となる。この程度の増収で、収支改善が成功するまでの数年間は財政状態はばう健全に保たれると予想される。

本会の財政状態に関して、御質問あるいは御提言を歓迎します。

財政小委員会(文責 松尾禎士)

1982年度第1回日本地球化学会

評議員会 議事録

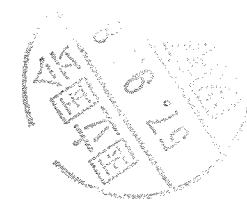
1982年2月13日(土) 17時10分—20時05分

(本号)

2/5-314

名簿(2年に1度発行)
充当金として4504円

10ページ左コラム中
左記の戸に
内の字句も
加えて下さい



4,600千円、地化が1,180千円およびニュース30千円が予定される。これらの発送費に800千円を要する。編集費はG. J. 800千円、地化102千円と緊縮予算が計上されている。年会・例会費用は320千円があてられている。日本学会事務センターへの事務委託費は1,400千円という巨額である。その他庶務費300千円; 会議費300千円; 通信費150千円; 選挙費250千円; 旅費780千円および雑費50千円を総計すると約11,510千円となる。

2) 収支のバランス

上にのべたように、寄附金を除くと1983年度の収入は1982年からのかなり楽観的な繰越金額を含めても支出予定を約1,000千円下まわることになる。もとより繰越金を残す余裕はない。しかも収支のみつもりに是不確定要素がある。例えば印刷費の値上りはみこんでいない。従ってこのまゝでは1983年度の終りは本会の財政状態は危機的なものになるおそれがある。

3) 財政健全化の方策

3) - a 収入増

G. J. の図書館ないしは個人購読部数を増やすことと単価を値上げすること。一案として部数を現在の

行う。なお、Vol. 16 (No. 1) は6月末発行の予定である。

4. 行事委員会(松本前行事委員)

1982年2月例会を2月13日午後実施した。

III 議事

1. 1982年度年会について

10月18日(月)—20日(水)の3日間琉球大学において行うことにした。会員への要旨集の事前配

び課題討論題目の選定は琉球大学一任した。

いて

に開催することとし、内容は幹事

て

び「地球化学」などの雑誌の保管料については日本学会事務センターとさるとにした。

地球化学宇宙化学研究連絡会委員の

田彰正、松尾禎士会員の推薦を承認

げ問題を検討するため財政小委員会とにした。委員長に松尾副会長を選入選を一任した。

3月までに次の方々が入会されました。致します。

所	属	備考
工業技術院地質調査所		
1本大学文学部		
1京工業大学理学部		学生会員
1北海道大学理学部		"
1京工業大学理学部		"
1建設技術研究所		
1京大学農学部		
1海大学理学部		
1千葉県公害研究所		
1工業技術院地質調査所		
1神戸大学大学院自然科学研究科		学生
1名古屋大学水圏科学研究所		学生会員
1東京大学原子核研究所		
1筑波大学地球科学系		
1名古屋大学理学部		
1日本油脂(株)三國工場		

所 属 備考

田中 信幸	名古屋大学水圏科学研究所	学生会員
品田芳二郎	関東建設	
西泉 邦彦	在外会員登録	
有泉 昌		

(財政状態の現状—会費値上げと関連して)

1) 1983年度の予算の概略

1) —a 収入

1982年6月現在の正会員(会費6,000円)学生会員(会費4,000円)24名、賛助会員(会費14名から入金しうる可能金額は5,010千円、85%とすると会費納入期待額は4,260千円で、(1982年6月現在の長期会費滞納者は51名、で約800千円である滞納者からの会費納入をみつめる。)

Geochemical Journal (G. J.) は自印刷し、各号2,300円で約350部(1981年266, 国内60)が国内外の図書館などで購入日本学会事務センターで手数料を40%とらへは毎年6回発行されるから、 $2,300 \text{円} \times 6 \times 1 \approx 2,900$ 千円の収支がみこまれる。日本語の(地化)は毎号1,000部印刷され、約70部が円で図書館などで購入される。その結果、 $2,300 \times 70 \times 0.6 \approx 150$ 千円の収入がみこまれる。らの出版助成金は1,500千円が予定されている1982年度からの繰越金を880千円とみると、は約10,190千円、先程死去された菅原 健名族からいたった寄附金300千円を加えて約10,4

1) —b 支出

会誌印刷はVol. 15の実績にもとづいて、4,600千円、地化が1,180千円およびニューが予定される。これらの発送費に800千円編集費はG. J. 800千円、地化102千円と計上されている。年会・例会費用は320千円に上されている。日本学会事務センターへの事務委託千円という巨額である。その他庶務費300千円千円;通信費150千円;選挙費250千円;旅費78千円;雑費50千円を総計すると約11,510千円となる。

2) 収支のバランス

上にのべたように、寄附金を除くと1982年からのかなり楽観的な繰越でも支出予定を約1,000千円下まわることにより繰越金を残す余裕はない。しかも収支には不確定要素がある。例えば印刷費の増減はよくわからない。従ってこのまゝでは1983年日本会の財政状態は危機的なものになるおそ

3) 財政健全化の方策

3) —a 収入増

G. J. の図書館ないしは個人購読部数を増やすことと単価を値上げすること。一案として部数を現在の350部から400部に増やし、単価を2,300円から2,800円にすると、1) —a でのみつもりより約

1,100千円増がみこまれる。この試算を絵に書いた餅に終らせないためには、Vol. 15までの論文リストを作り、注文票を附した紹介パンフレットを作って配布

と予想される。

本会の財政状態に関して、御質問あるいは御提言を歓迎します。

財政小委員会(文責 松尾禎士)

1982年度第1回日本地球化学会

評議員会 議事録

日時: 1982年2月13日(土) 17時10分—20時05分

場所: 学士会館本郷分館

出席者: 北野 康会長、松尾禎士副会長

一國雅巳、岡部史郎、小椋和子、小倉紀雄、
椎川 誠、島 誠、杉村行男、田中 剛、
角皆静男、寺田喜久雄、野津憲治、半田暢彦、
増田彰正、松本英二、馬淵久夫、水谷義彦、
各評議員

I 会議にさきだち以下のことを承認した。

1. 前回の議事録を承認した。
2. 会務分担案を承認した。
庶務委員 半田暢彦
会計委員 小椋和子
行事委員 野津憲治
ニュース委員 田中 剛
編集委員 G. J. 関係 一國雅巳
地球化学関係 小倉紀雄 小沼直樹
3. オブザーバーとして下記の会員の評議会への出席を承認した。
加藤喜久雄(庶務関係事務の補佐のため)

II 報告

1. 学術会議関係(松尾副会長)
 - ・ IAVCEI および IAGC の開催(1982年8月)が紹介された。
 - ・ 学術会議第12期より本学会選出の地球化学宇宙化学研究連絡会委員数は1名減となる。
 - ・ 日本学術会議の隕石学宇宙化学小委員会に本学会から委員1名を推薦する。
2. 庶務委員会(半田評議員)
 - ・ 57年度の本学会事務委嘱について日本学会事務センターと契約を完了した。
3. 編集委員会(増田評議員)
 - G. J. Vol. 15 No. 6: 3月中に配布の予定である。
 - ” Vol. 16 No. 1: 原稿〆切を完了し、現在印刷中である。
 - ” Vol. 16 No. 2: 原稿を受付中である。「地球化学」は編集を小倉紀雄 小沼直樹両評議員が担当し、Vol. 16以降いくつかの新しい試みを行う。なお、Vol. 16 (No. 1) は6月末発行の予定である。
4. 行事委員会(松本前行事委員)
1982年2月例会を2月13日午後実施した。

III 議事

1. 1982年度年会について
10月18日(月)—20日(水)の3日間琉球大学において行うことにした。会員への要旨集の事前配布についておよび課題討論題目の選定は琉球大学と行事委員に一任した。
2. 6月例会について
6月12日(土)に開催することとし、内容は幹事会に一任した。
3. 保管料について
「G. J.」および「地球化学」などの雑誌の保管料の支払いについては日本学会事務センターとさらに検討することにした。
4. 日本学術会議地球化学宇宙化学研究連絡会委員の推薦について
本田雅健、増田彰正、松尾禎士会員の推薦を承認した。
5. 財政小委員会
学会費の値上げ問題を検討するため財政小委員会を設置することにした。委員長に松尾副会長を選出し、委員の人選を一任した。

新入会員

1982年6月10日までに次の方々が入会されました。よろしくお願い致します。

氏名	所	属	備考
鹿野 和彦	工業技術院地質調査所		
佐藤キエ子	日本大学文理学部		
渡邊 修一	東京工業大学理学部		学生会員
赤坂 正秀	北海道大学理学部		”
吉田 尚弘	東京工業大学理学部		”
石川 邦男	鋼建設技術研究所		
木村 信人	東京大学農学部		
香山 勲	東海大学理学部		
佐藤 賢司	千葉県公害研究所		
臼井 朗	工業技術院地質調査所		
川上 紀	神戸大学大学院自然科学研究科		学生
富山 千里	名古屋大学水圏科学研究所		学生会員
井上 照夫	東京大学原子核研究所		
松倉 公憲	筑波大学地球科学系		
古川 路明	名古屋大学理学部		
鶴見浩一郎	日本油脂㈱三國工場		

退会会員

氏名	所	属	備考
田中 信幸	名古屋大学水圏科学研究所		学生会員
品田芳二郎	関東建設		
西泉 邦彦	在外会員登録		
有泉 昌			

215-314

日本地球化学会ニュース

No. 97
1983. II. 2

杉浦 敏昭 神奈川県立金井高
佐原良太郎
杉山 隆二 東海大海洋
植田 良夫 東北大学理学部
小川 務 愛知県公害調査センター
越智 正 香川大学農学部
岡林 弘之 放医研
安島 忠秀 鳥取県立米子北高
真室 哲雄
出口 泰弘 建設技研・柏計測室
松波 文博
竹下 寿 門司校
紀本電子工業(株) 賛助会員
大塚 良平 早稲田大学理工学部
杉野 則夫
種子田定勝
渡辺 淳夫
正会員 790 学生 24 賛助 13 名誉 4

「北半球における第四紀氷河作用」国際集会報告
この会議は 1974 年以来毎年開催されているが、発
足当初はヨーロッパの第四紀氷河作用が主でありその
ご大西洋を隔てた北アメリカとの対比の上で北半球を
一単位として論ずるようになった。アジアでの開催は
今回が最初である。
1981 年 7 月 28 日～31 日京大会館において 47 名 (国
外 19, 国内 28) の研究者を集め開催された。主催は堀
江で本学会は関連学会とともに後援した。本集会は、
堀江を中心に 1971 年琵琶湖において 200 m 堆積物コ
アが採取されその解析がすすんだことと日本高山域
モレーンとの対比が世界にさきがけて行われてきたこ
とから、ヨーロッパ、北アメリカの研究資料を持ちよ
り、さらにグローバルな観点から北半球の氷河作用に
ついての対比、討論を行うことを目的にしたもので
あった。

集会は次のサブテーマで行われた。
(1) アジアにおける氷河作用および低位置堆積物と
山岳モレーンの対比 (6 講演)
(2) 琵琶湖および他の遺存湖の堆積物コア試料と
古気候 (5 講演)
(3) 古地磁気と気候変動 (4 講演)
(4) ヨーロッパ、北アメリカ、アジアの氷河作用に
関する総合討論 (7 講演)
会議の主題があまりなじみのないもののためか地球
化学者の参加は少なかったが熱心な討論が行われた。
中でも本場アルプス氷河の研究者 (スイス、オースト
リア) が日本アルプスを実際に歩きその成果を発表し

たのが特に印象的であった。また会議のなか日には比
叡山、琵琶湖、古琵琶湖層、京大琵琶湖古環境実験施
設の見学に費された (石渡良志、堀江正治)。

IAGOD Commission on Manganese 日本委員
からのお願い

IAGOD Commission on Manganese および、
IGCP Project No 111 "Genesis of Manganese
Ore Deposits" では manganese deposits の地質
学、地球化学的研究を国際的規模で推進しています。
これに関連して、IAGOD Commission on Man-
ganese 日本委員会では我国における Manganese
Deposits の地質学、地球化学的研究業績を網羅する
よう努力しています。

つきましては 本学会員の中で Manganese Dep-
osits の鉱物、鉱床、地球化学に関する研究論文をお
もちの方は別刷一部を 10 月末日までに下記へ御送付下
さい。

なお、御送付いただいた別刷は日本からの Prog-
ress Report の資料にいたします。また、研究論文
は雑誌の種類は問いませんが 1981 年度以降のものを
おねがいします。

別刷送付先

〒060 札幌市北区北 10 条西 8 丁目
北大、理、地質学鉱物学教室
針 谷 有

IAGOD Commission on Manganese
日本委員会

ニュース記事や御意見をお寄せ下さい

本ニュースは年 3 回 (大体 5 月, 9 月, 1 月) 発行
されます。記事は横書き 1 行 24 字 (用紙は自由) にて
書いていただければ助かります。次回 97 号は 1 月 10 日
〆切 1 月下旬発行の予定です。

編集者 田中 剛, 清水 洋
〒305 茨城県筑波郡谷田部町東 1-1-3
地質調査所 地球化学課
電話 0298 (54) 3558
発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生 2-4-16
学会センタービル (4 F)
日本学会事務センター内
電話 東京 03 (815) 1903
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

1982 年度日本地球化学会 総会報告

10 月 19 日 (火) 15 時から 16 時まで、琉球大学教養部に
おいて会員約 70 名出席のもとに行われた。総会次第は
下記の通りである。

1. 開会
2. 議長選出
3. 会長挨拶
4. 年会委員長挨拶
5. 1981 年度事業および決算報告
6. 1982 年度事業および会計中間報告
7. 1983 年度事業計画および予算案
8. その他
9. 閉会

1981 年度 事業報告

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1980 年 12 月末	818	13	4	835
入会	44	0	0	44
退会	19	0	0	19
1981 年 12 月末	843	13	4	860
2. 年会・委員会等開催数				
年会 1	(¹⁰ / ₁₀ ~ ¹⁰ / ₁₂ , 清水)			
総会 1	(¹⁰ / ₁₁ , 清水)			
例会 2	(² / ₁₄ , ⁶ / ₁₃ , 東京)			
評議員会 4	(² / ₁₄ , ⁶ / ₁₃ , ¹⁰ / ₁₀ , ¹² / ₁₃)			
幹事会 2	(⁴ / ₁₈ , ⁹ / ₂₆)			
財政委員会 1	会誌編集委員会 1			
ニュース委員会 1	行事委員会 1			

3. 会誌発行
G. J. Vol. 14 (5, 6), Vol. 15 (1, 2, 3) 計 5 号
地球化学 Vol. 14 (2), Vol. 15 (1) 計 2 号
4. ニュース発行
Nos. 91, 92, 93 (計 22 頁)
5. 学会共催
第 18 回理工学における同位元素研究発表会 (共催)
6. 例会
2/14 熱水系の同位体地球化学

(1) 日本の温泉水、火山噴気の起源

松葉谷 治氏

(2) 岩石・鉱物からみた熱水活動

松久 幸敬氏

6/13 新しい年代測定法

(1) 加速器による年代測定法の動向

中井 信之氏

(2) Sm-Nd 年代測定法の応用

中村 昇氏

1981 年度決算報告 収 入 の 部

	円	(予算, 円)
1. 会 費	4,896,124	(5,386,000)
2. 刊行物売上	5,276,491	(4,584,000)
3. 広告料	0	(100,000)
4. 助成金	1,510,000	(1,500,000)
5. 雑収入	128,427	(50,000)
6. 名簿積立	250,000	(250,000)
7. 繰越金	3,343,232	(1,164,000)

計 15,404,274 (13,034,000)

支 出 の 部

1. 事業費	10,326,732	(10,605,000)
1.1. 出版費	8,276,257	(8,535,000)
会誌印刷	6,863,967	(6,900,000)
編 集 費	900,000	(900,000)
発 送 費	512,290	(735,000)
1.2. 行事費	244,000	(300,000)
1.3. 名簿印刷費	635,000	(500,000)
1.4. 事務委託費	1,113,195	(1,100,000)
1.5. 会員事務郵税	58,280	(170,000)
2. 管理費	999,729	(1,560,000)
2.1. 庶務費	250,000	(650,000)
2.2. 会議費	192,969	(300,000)
2.3. 通信費	8,450	(60,000)
2.4. 旅 費	292,400	(500,000)
2.5. 雑 費	31,810	(50,000)
2.6. 選挙費	224,100	(.0)
3. 次期繰越金	4,077,813	(869,000)

計 15,404,274 (13,034,000)